

体制転換と作品解釈におけるアクチュアリテイの変容

近年のハンガリーを事例に

辻 河 典 子

はじめに

本稿では、ロックオペラ『国王イシュトヴァーン』(Sztáin, a király)が一九八三年八月にハンガリーで初演されてから三〇周年を記念した公演を、一九八九―一九〇年の体制転換から二〇年以上が経過したハンガリー社会の変容を参照しながら分析する。

『国王イシュトヴァーン』は一九八三年八月一八日にブダペシュトの市立公園 Városliget 内の丘¹で野外劇として初演されたロックオペラで、一〇世紀を舞台に、カルパチア盆地に定住したマジヤル人のキリスト教受容と西方キリスト教世界への参入、それに伴うイシュトヴァーン一世の戴冠と中世ハンガリー王国の成立を題材とした歴史劇である。作詞はブロー

ディ・ヤーノシシュ Brody János²、作曲はセレーニ・レヴェンテ Szörényi Levente³、共に一九六〇年代から七〇年代のハンガリーを代表するロックグループのイッレーシユ Iles⁴のメンバーが制作に携わった。上演会場が変更されるほどに上演前から本作は大きな関心呼び⁵、上演は八月二一日まで行われた。翌年にはコルタイ・ガーボル Koltay Gábor⁶を監督としてこの時に収録された映像を用いて映画化もされた。一九八四年八月には南部の都市セゲドの大聖堂広場に設けられた野外劇場で再演され⁷、その後も劇場での再演や国营ラジオでの部分的な放送が度々行われた。本作は国外のハンガリー人コミュニティに受容されただけでなく、当時のハンガリー文化を代表する作品としてユーゴスラヴィアや西ドイツなど他国との文化交流行事の際にも紹介された⁸。このように『国王イシュトヴァーン』が

異例なまでの成功を取めた背景として、民族の過去の儀礼を呼び覚まして共同体を礼賛するという大衆の間での要求にこの作品が注目したことが当時から指摘されてきた。体制転換後も本作は再演が繰り返され、広くハンガリー社会で知られている。

『国王イシュトヴァーン』は歴史劇ではあるが時代考証は厳密ではなく、多様な解釈が可能である。その中でも、作品の主軸である主人公イシュトヴァーンとその親族コツパニーユとの対立を一九五六年秋のハンガリー事件とその後のハンガリー政治に擬える解釈は上演当初から指摘されてきた⁷。すなわち、ローマ教会の支援を受けて戦いに勝利して国王となったイシュトヴァーンを一九五六年秋の改革の動きを軍事介入で制圧したソ連の支援を受けて政権の座に就いたカーダール・ヤーノシュ Kádár János と重ね、マジヤル人の部族的な伝統を重視して外部からの干渉を排除すべく信念を持って戦いに赴いて敗れたコツパニーユを一九五六年秋の改革を求める動きの中で首相に復帰してワルシヤワ条約機構からの離脱などハンガリー独自の道を目指したソ連軍の軍事介入後に逮捕・処刑されたナジ・イムレ Nagy Imre と重ねるといふ解釈である。但し、オリジナル版の制作に携わった者たちへのその後のインタビューを参照する限り、制作側がこの解釈を当初から意図していたとは言い難い。また、初演直後からセレーニとブローディによるイシュトヴァーンの人格化の試みは指摘されていたが、当時の反体制派の間でも本作の解釈は分かれており、むしろ体制側によ

るカーダールの人格化につながるものとして批判されることもあった¹⁰。いずれにしても、『国王イシュトヴァーン』をカーダール体制下のハンガリーと結びつけて解釈することには一九八〇年代当時のアクチュアリティがあった。

体制転換を経てソ連という外部からの干渉を解消した一九九〇年代以降のハンガリー政治・社会の変化がこの作品が持つアクチュアリティにもたらした変化に関する考察は、後述するよう制作者たちへのインタビューや再演時の劇評で指摘される程度である。一方で、一九八九―一九〇年のハンガリーで進行した「一九五六年」(および象徴としてのナジ)の再評価は体制転換を象徴する出来事であったため¹¹、現在でも旧反体制派を源流とする右派を中心に本作を体制転換に至る道筋を作った作品だと捉える見解が根強い¹²。その中には「国王イシュトヴァーン」は今日では永遠の価値を持つ古典的で民族的なロックオペラとなった」とまで評し¹³、体制転換およびそれを原点とした現在のハンガリー社会を理解する上での一種の正典として位置づける立場も見られるほどである。

以上の状況から、本稿では二〇一三年に初演から三〇周年を記念してアルフェルディ・ローベルト Alfréd Robert が演出した『国王イシュトヴァーン』とそれに対する批判を対象として、体制転換から二〇年以上を経たハンガリー社会で本作が持ったアクチュアリティを考察する。まずオリジナル版の『国王イシュトヴァーン』を紹介した後、二〇一三年のアルフェルディ演

出版をオリジナル版と比較し、提示された主な批判を整理する。その上で本作を通じて、体制転換から二〇年以上を経たハンガリー社会の分析を行う。

『国王イシュトヴァーン』の作品については、オリジナル版は初演から二五周年を記念して二〇〇八年に発売された一九八四年の映画のDVD¹⁴を、アルフェルディ演出版(三〇周年記念版)は二〇一三年に発売されたDVD¹⁵を参照する。劇評については一般的な受容の状況を調べるために左派系日刊紙『人民の自由』*Népszabadság*¹⁶、右派系日刊紙『ハンガリー国民』*Magyar Nemzet*¹⁷、およびポータルニュースサイトIndex.hu¹⁸、中道系経済誌*bug*のオンライン版などに掲載された記事を参照する。

一 『国王イシュトヴァーン』の作品概要

一―一 あらすじ

『国王イシュトヴァーン』は「遺産Az Öröksejg」¹⁹、「エステルゴムEsztergom」²⁰、「コッパ―ニユ首領Koppány vezér」²¹、「国王イシュトヴァーンIstván, a király」²²の四幕から成る。以下では一九八三年初演のオリジナル版の映像を使った映画を参照してあらすじを整理したい。

オープニングにL・v・ベートーヴェンがイシュトヴァーン一

世を題材とした『シユテファン王』の序曲(変ホ長調)が流れた後、第一幕「遺産」が良き支配者について聴衆に問いかけるイッレーシユの歌「君は誰を選ぶ?」から始まる¹⁸。マジヤル人の大首領ゲーザに招かれたキリスト教会(ローマ教会)の宣教師たちが到着し、ゲーザの息子イシュトヴァーンはバイエルン公の娘ギセラと結婚して配下の民たちから祝福を受ける。同じ頃、マジヤル人の旦那衆三人は人間の誘惑への弱さを歌っていた。キリスト教に改宗したコッパ―ニユの娘レーカは教会で祈っていたが、コッパ―ニユの従者ラボルツは彼女に間もなく大首領となる自分の父親を頼るように告げ、ハンガリー語がわからない神は必要ないと伝える。ゲーザが亡くなり、葬儀がキリスト教式で執り行われた。その葬儀の場で自らゲーザが取り組んだことを継ぐ旨を誓うイシュトヴァーンに対し、親族(千年紀転換期)によれば大おじ)のコッパ―ニユがマジヤル人の伝統に従えば自らが後継者であると主張して対立する。イシュトヴァーンはキリスト教の神に従う以外に道はないと答え、両者は双方の支持者が氣勢を上げる中に取り囲まれる。

第二幕「エステルゴム」のエステルゴムとは、ハンガリー王国成立後に国王の拠点とされた地である。レーカや民たちが平和を祈り、吟遊詩人たちがイシュトヴァーンの幸せを願うが、彼らがゲーザの時代の栄光について歌い始めるとイシュトヴァーンの母シャロルトは止めさせる。そこにコッパ―ニユの使者としてラボルツが訪れ、伝統に従ってコッパ―ニユが大首領と

なるために未亡人となったシャロルトを娶ることを依頼するが、シャロルトは拒絶し、ラボルツは直ちに処刑される。これを見た先の旦那衆三人はイシュトヴァーンにコツパーニユを文明化されていないと嘆うが、イシュトヴァーンは逆に彼らを遠ざける。イシュトヴァーンは母シャロルトから強くなるように励まされるが、逡巡は尽きなかった。同じ頃、ギゼラはドイツからの騎士の一人ヴェツェリンと過ごし、政治にはうんざりだと歌う。彼女はイシュトヴァーンとの子供を欲し、ヴェツェリンは戦いと領地を欲していた。イシュトヴァーンはマジャル人の公として選ばれ、民からの祝福を受ける。祝宴の後に独りになったイシュトヴァーンはどうすれば良いかと神に祈る。イシュトヴァーンに密かに心を寄せるレーカはその姿を陰で見つめていた。

第三幕「コツパーニユ首領」はコツパーニユとイシュトヴァーンが戦いへと進んでいく様を描く。コツパーニユは彼付きの祈禱師トルダと共に配下の民たちに自由を求めて立ち上がることを呼びかけ、民たちから熱狂的な支持を受ける。コツパーニユの三人の妻たちは彼を男として称えるが、彼の意識は来たるべき戦いに向いていた。そこを訪れた前出の旦那衆三人がイシュトヴァーンの暗殺を勧めるが、コツパーニユは彼らを追い払う。彼はトルダにイシュトヴァーンと公正に戦うことを告げ、伝統宗教の助けを求める。レーカは父コツパーニユに対し、彼が裏切り者として四つ裂きにされる夢を見たことを伝えて戦い

の回避を求めるが、聞き入れられなかった。イシュトヴァーンもコツパーニユの前に現れ、ローマ(西方キリスト教)を受容するのであれば指導者の地位を明け渡すことを打診するが、コツパーニユはこれを拒んだ。トルダは血塗られた剣をコツパーニユに与え、彼が勝利すればマジャル人に輝かしい未来が待っているであろうと予言する。ついにイシュトヴァーン軍とコツパーニユ軍は入り乱れて戦い、コツパーニユは戦死する。

第四幕「国王イシュトヴァーン」は吟遊詩人が戦いの犠牲者を追悼するところから始まる。イシュトヴァーン側についた者たちは勝利の宴を開き、褒賞を求める。そこにレーカが現れて父の遺体の引き取りを切望する。イシュトヴァーンは心を動かされるが、母シャロルトが彼女を追い返す。シャロルトは見せしめのためにコツパーニユの遺体を四つ裂きにするように命じる。イシュトヴァーンは深く悩んで神に祈るが、最終的に母の決定に従い、コツパーニユの遺体は四つ裂きにされる。イシュトヴァーンはエステルゴム大司教アストリクの下でハンガリー国王として戴冠し、民たちから祝福を受ける。王としてイシュトヴァーンは神に「私は王です。神よ、あなたの意思で、全てのハンガリー人の王です。そして、この人民たちの国にしたい」と私は願います。あなたと共に、神よ。しかしあなた抜きで」と語りかける。

一―二 『千年紀転換期』からの改変

『国王イシュトヴァーン』は劇作家ボルディジャール・ミクロシユ Boldizsár Miklós が一九七二年から一九七四年にかけて制作した戯曲『千年紀転換期 *Ezredforduló*』(一幕＋一幕の二部構成で一九八一年に雑誌『劇場 *Színház*』で発表、書籍化されたのは一九九〇年)¹⁹ が下敷きとなっている。『国王イシュトヴァーン』は四幕構成だが、『千年紀転換期』では最後から二つ目の場面と最後のイシュトヴァーンの戴冠の場面を除いて特にタイトルは付いていない。プロローディへの二〇〇八年のインタビューによれば、ボルディジャールも彼と同じく作品の照準をイシュトヴァーンとコッパニニユの対立に合わせていたので、二人はその上演をいつかは実現させるという意欲を持って話し合っていた。但し、彼らは当時から『千年紀転換期』に書かれているものが舞台上で実現できるとは思っていなかった²⁰。

『国王イシュトヴァーン』が四幕構成になったのは技術的な理由であった。一九八一年のイッレーシユのコンサート映画の興行が成功し、コルタイが監督する新しい音楽映画の制作が可能となった。しかし、その映画の脚本作りが大幅に遅れたため、彼らは音楽家としてむしろレコード化を考える必要があるという考えに至った。その結果、二枚組のレコードアルバム(四面)に合わせて物語は四部構成に、またレコードの片面の収録可能

時間が約二〇分なので劇の長さもそれに合わせて制作された。この録音が一九八三年八月の『国王イシュトヴァーン』初演時の下敷きとなり、その際に収録された野外劇の映像から翌年に映画が制作された²¹。このため『国王イシュトヴァーン』は『千年紀転換期』の内容を大幅に凝縮し、必要に応じて改変されている。プロローディは二〇一〇年のインタビューで、カードールとナジのアナロジューは『国王イシュトヴァーン』よりも『千年紀転換期』の方に強く見られることを指摘し、このアナロジューの描写が当時は頻繁にカードール擁護だと見なされたことを振り返っている²²。

一―三 解釈の多義性

前述の通り、『国王イシュトヴァーン』は「一九五六年」のアナロジューとして解釈されることが通例だが、オリジナル版の制作に携わった者たちに対する各種インタビューを参照する限り、彼らが当初から「一九五六年」に擬えた構図を目指していたとは言いがたい。例えば作詞者のプロローディは二〇〇八年のインタビューで、ハンガリー人のような小さな民族はアイデンティティを追求するために絶えず諸大国と戦わねばならない一方で、同盟なしには歴史を生き延びられないという矛盾が様々にハンガリー史全体で進行していたことが彼にとつて興奮させられるものであったこと、そして一〇世紀末のハンガリー国家が形成

された頃にもこの矛盾が基本対立として存在しており、イシュトヴァーンとコッパニーユの対立がそれを象徴していたと考えたことを述べている²³。二〇一〇年のインタビュでプロデーが語ったところによれば、この矛盾の描写が『国王イシュトヴァーン』のドラマトゥルギーであり、「[ハンガリー]民族の運命の問題を強く言い当て」ていた²⁴。このドラマトゥルギーが比較的良質で多義的であったため、イシュトヴァーンとコッパニーユの対立が様々な目的に用いられる可能性があったと彼は考えていた²⁵。なお、プロデーは一九八三年八月の上演に向けた稽古現場を取材した国营テレビの番組でインタビュアーから本作品について問われた時に「永遠のハンガリーの問題 *örök magyar problema*」が扱われているという見解を示している²⁶。『国王イシュトヴァーン』で扱われるテーマはハンガリー史を貫く課題であるという彼の説明は初演当時から継承されていると推定される。

二 三〇周年記念版

二一 一 オリジナル版からの改変と批判

『国王イシュトヴァーン』の初演から三〇周年を迎えた二〇一三年八月にはアルフェルディ・ローベルト *Alföldi Robert* が「I.K. 3.0」と銘打った記念公演を演出した。アルフェルディは

二〇〇八年から五年の任期で国民劇場の支配人を務めていたが、二〇一〇年春に成立した第二次オルバーン政権による次期支配人の選考に漏れ、二〇一三年六月末で退任していた²⁷。退任直前の同年五月には首相特使を務めていた演出家のケレーニ・イムレ *Kerenyi Imre* がアルフェルディたちの活動を批判する際にゲイの蔑称を用いたことで左右両派から激しい批判を受けた²⁸。同年九月、国民劇場支配人の在職期間を振り返った本の中でアルフェルディはゲイであることをカミングアウトし²⁹、その後はブライド・パレードなどの性的少数者の権利擁護を求める運動にも積極的に関与している。

アルフェルディが演出した『国王イシュトヴァーン』は二〇一三年八月一七・一八・二〇日にセゲドの大聖堂広場に設けられた野外劇場で、八月三〇・三十一日にはブダペシュトで上演された。八月二〇日にはセゲドでの公演の映像が主要民放テレビ局の一つ *RTL Klub* でも放送された。三〇周年記念版は主要登場人物が現代風の衣装や小道具を用いるなど非常に斬新な演出がなされた。オリジナル版のコルタイによる演出からの脱却の試みについては認識されたが³⁰、三〇周年記念版は上演直後から厳しい批判を受けた。

技術的な部分では、音楽および役者の振り付けが主に批判対象となった。オリジナル版は物語だけでなく歌そのものも重視しており、主要登場人物には歌手としてのキャリアを積んできた者が登用された³¹。これに対して三〇周年記念版の主要登場

人物は役者として活動する人たちが演じ³²、音楽も全体的に速く演奏された。このためオリジナル版と比較すると役者の声量不足や音程の外れ、ピッチのずれが散見された³³。振り付けに関しては後述する。オリジナル版との演出の違いは様々に挙げられるが、以下では三〇周年記念版を解釈する上で重要と思われる五点を紹介したい。

①外部勢力の描写

まずはローマからのキリスト教会とその聖職者の描かれ方である。オリジナル版でも十字架を持った宣教師たちが舞台上を歩く描写は効果的に用いられていたが、三〇周年記念版では黒衣で顔も覆った者たちが赤い十字架を持つ演出がなされた³⁴。

この赤い十字架はイシュトヴァーン軍とコッパニュー軍の戦いの場面でコッパニュー側の人々（異教徒）を殺す道具としても用いられ、キリスト教が戦争に積極的に関与している様子が描かれた。コッパニュー派に対峙する黒衣の集団には、黒いスーツにサングラスをかけた男性集団や黒い覆面目出し帽を被ってライフル銃を持つ者たちも登場した。このキリスト教会の描き方に対しては「反キリスト教的」（少なくとも「反キリスト教会的」）であると捉えた右派から批判が浴びせられた³⁵。

ドイツ騎士たちの描かれ方もオリジナル版とは大きく異なる。彼らの衣装はナチス・ドイツ期の国防軍の軍服を想起させるもので³⁶、ラボルツの処刑の場面での発砲や戦争の場面でのコッ

パニュー派への一斉射撃のように、無慈悲に敵を殺す集団として演出されていた。キリスト教会とドイツ騎士というイシュトヴァーンに協力することになる外部勢力が命を奪うほどの暴力を伴っていた点はオリジナル版と比べて強調されている。

②演技するゲーザの存在

オリジナル版のゲーザは歌詞での言及および葬儀の場面での棺の登場のみであったが、三〇周年記念版ではゲーザ役が姿を見せ、第一幕中盤に彼の死の場面と台詞が追加された。この場面では、ラボルツが「ハンガリー語がわからないような神は必要ない」と歌った直後にゲーザは「否、必要だ！」と反論して倒れ、そのまま亡くなる。

この追加された台詞に関しては、アルフェルデイがイシュトヴァーンとコッパニューの対立を当人たちは気づかずにはローマ教会（ないしアストリク）によって人為的に作られた偽りの対立として描いており、それは体制転換から二〇年以上が経過して外国の圧力に従うように歴史上強制されていたことが理解可能な現実ではなくなっている時代（すなわち二〇一三年当時）にも論理的であるという分析がある³⁷。この分析に従うならば、追加されたゲーザの台詞は後に訪れる肉親同士の争いの悲劇性をより強調する役割を果たすものだと考えられる。

③レーカとイシュトヴァーンの接近

第二幕の最後、ゲーザを継いで公となったイシュトヴァーンが祝宴の後で苦悩して神に祈る場面では、イシュトヴァーンがレーカに頼るように心を通わせて共に歌うも、そこに現れたトルダにレーカは連れて行かれ、レーカに追いつがろうとしたが届かずに舞台上に横たわったイシュトヴァーンに十字架の影が掛かるといふ演出がなされた。オリジナル版のレーカは祈るイシュトヴァーンを遠くから見つめるだけであった。①・②と併せ、ここでも十字架が人々を分断する存在の象徴として使われている。

レーカは『千年紀転換期』で創作された人物である。プロローグは二〇〇八年のインタビューで彼女を気に入っていると述べている。その理由はその人物像を彼が創作したことによるとだけでなく、作中で彼女が根本的な対立を解決しうる人民の知恵を象徴し、イシュトヴァーンとコッパニーニユの対立を解決しようとしていたためであった³⁸。三〇周年記念版でイシュトヴァーンがレーカと交流する演出に改変されたことで、イシュトヴァーンの苦悶を観客により強く印象づけることが可能になったと考えられる。但し、このような形でイシュトヴァーンが演出されたことに対しては「イシュトヴァーンはドブジェ・ラースロー（ハンガリー王としてはウラースロー二世。一五世紀末にボヘミア王としてフス派との和解を成立させた）ではない」とアルフェルデイの歴史認識を誤りだと指摘し、この演出のコン

セプトは時代を問わずハンガリーでは失敗しているという批判も寄せられた³⁹。

④マジャル人の民の描かれ方

三〇周年記念版での振り付けでは、オリジナル版と比べてマジャル人の民のプリミティブさや野蛮さが強調された⁴⁰。例えば、イシュトヴァーンとギゼラの結婚を祝う宴の場面で地面の上に置かれた皿の中の食べ物をおいしく大食いする演技や、ゲーザの葬儀の場面では顔に泥を塗りたくって追悼する演技が見られた。特にコッパニーニユ配下の民の演出でその傾向が強く、第三幕のイシュトヴァーンとの戦争に備えて士気を高める場面では、（作り物の）馬の首をコッパニーニユが刎ねて大量の血（を模した液体）が流れるのを見た一同が氣勢を上げたり、女性たちが髪を振り乱して叫んだりした⁴¹。

オリジナル版とは異なり、戦いに敗れて傷つき力の無いコッパニーニユ派の民も舞台上に残し、勝利に喜ぶイシュトヴァーン派と対照的な様子を見せながら第四幕を進めたのも三〇周年記念版の特徴である。①から③で述べたように、三〇周年記念版では外部勢力によって人々が分断されている状況をオリジナル版よりも強調ないし明示するかなような演出が行われた。傷ついたコッパニーニユ派の人々を退場させなかつた演出にも、人々の間での分断やその影響を敢えて認識させる効果があつたと考えられる。

⑤ 聖王冠型の檻に閉じ込められる「同」とハンガリー国歌の斉唱

三〇周年記念版では舞台上に鉄製格子状の檻のような櫓が設けられ、その上で音楽の演奏や一部の演技が行われた。この櫓の天井には十字を渡したドーム状の蓋が付いていた。言うまでもなくイシュトヴァーンの聖王冠を模したものであった。第四幕最後のイシュトヴァーンの戴冠の場面でイシュトヴァーンが最後の台詞「あなたと共に、神よ。しかしあなた抜きで」を述べた後、オリジナル版にはなかった場面が以下のように追加された。舞台上の演者たちがこの櫓に入り、檻に閉じ込められる。気づいた民たちが騒ぎ始める中、イシュトヴァーンがハンガリー国歌を歌い始めた。吟遊詩人は檻の外からこの光景を見ている。次第に皆が彼に同調して国歌を歌うようになり、その中で天井の聖王冠を模したドームに十字架が立つ。国歌を歌い終わると暗転して劇は終わった。

この檻の演出に関しては劇中で明確な答えが提示されておらず、見解が分かれている。例えば、苦悩するイシュトヴァーンをハムレットに擬えて彼が「デンマークの牢獄」ならぬ王冠型の檻としてのハンガリーに囚われたのだとする見解がある⁴²。また、②で述べたイシュトヴァーンとコッパニーヌの対立がローマ教会によって作られたものだとする見解の延長として、不運が今日もハンガリー人を分断していることの表れであるという分析も見られる⁴³。国歌の演出に関してはオリジナル版の作曲者のセレーニからも違和感が表明された⁴⁴。

以上のように、三〇周年記念版ではオリジナル版から様々な改変がなされたが、特にローマ教会（ならびにその協力者であるドイツ騎士たち）という外部勢力によってマジカル人が分断されている状況がオリジナル版よりも強調され、十字架がその象徴として描かれていたことが指摘できるだろう。

なお、セレーニとブローディは八月十七日のセゲドでの初演時に三〇周年記念版を初めて鑑賞した。セレーニは詩（歌詞）を重視したアルフェルディが歌詞以上にコンセプトに近づける音楽面を犠牲にしてしまったことを残念に思う旨や、劇のメッセージは三〇年前の時代と比べて変わらずに作品中に集められていることを述べ、アルフェルディの演出に対して違和感を表明した⁴⁵。一方、ブローディは明言を避けながらも三〇周年記念版を鑑賞した時について「自分が『国王イシュトヴァーン』という」作品がこれほどまでに好きな作者であることを忘れていた」と言い添えており、アルフェルディの演出に何らかの不满を抱いたことがうかがえる⁴⁶。

二二二 その後の反響

劇中でのイシュトヴァーンやキリスト教の聖職者の描かれ方は、特に急進右派から激しく攻撃された。例えば、急進右派系のヨッビク⁴⁷のセゲド支部の党員で同市議会議員のケレストウ

リー・ファルカシュ・チャバ Kereszturi Farkas Csaba は二〇一三年八月一六日のゲネプロを鑑賞した感想を急進右派系のブログ Kuruc.info に寄稿した。この中で彼は三〇周年記念版が「民族への象徴的な侮辱の奥深い温床として、最も聖なる我々の感情と信念を泥へと貶めた」、「我々の民族的存在の破壊と反教権主義に塗れたものになった」と攻撃し、同作の目的を「聖職者たちへの侮辱を表明することによって、過去数世紀において国民的キリスト教的諸基礎にもとづいて機能してきた我々の王国を完全に無効にすることであった」と断じた⁴⁸。

このため、ブダペシュトでの公演時には会場の前で急進右派の諸団体による上演反対の抗議活動が、また、会場近くではこの動きに対抗する集会が開かれた⁴⁹。この一連の動きはハンガリーで二〇〇〇年代後半から強まった街頭の政治とその両極化を如実に描き出すものであった。主な新聞や雑誌、テレビ等での劇評はこうした上演反対要求をめぐる状況に対して、例えば「政治的あるいはその他の、劇場や芸術家とは異質な興奮」⁵⁰と評して否定的であった。

二一三 体制転換後のアクチュアリティの変容

体制転換後、ハンガリーでは西欧型の議会主義と市場経済を基盤とした政策が進められてきた。一九九九年三月の NATO 加盟、二〇〇四年五月の EU 加盟、更に二〇〇七年一二月のシ

エンゲン協定加盟は、ハンガリーが人や資本の移動の面でヨーロッパ他の国際経済と更に密接な関わりを持つようになったことを示す。そうした中で国内政治では、一九九〇年代半ばから社会党とフィデスの間での左右両極化の下で諸政党の勢力図が大きく変化した。二〇〇〇年代後半からは左派の退潮と急進右派勢力の台頭が顕著である。二〇一〇年の総選挙で勝利したフィデスとキリスト教民主人民党によって成立した第二次オルバーン政権は、現在に至るまで国会での多数派を背景とした全体的なポピュリズム路線の下で、伝統への回帰、メディアの統制強化、近年の難民問題に対する強硬路線と EU 批判などが国際的にも議論を引き起こしている。以下ではこうした状況下でアルフェルデイが演出しようとしたアクチュアリティを考察したい。

一九九〇年以降、社会主義体制の放棄とソ連軍の撤退という形で外部勢力は去り、「一九五六年」の一連の契機となった学生デモが起きた一〇月二三日は国民の祝日となり、「一九五六年」の体験をめぐる国民の間での分断も公式には昇華された。このため初演当時から「一九五六年」に擬えた解釈はアクチュアリティを失うと考えられる。しかし本稿の冒頭で述べたように、その後も「一九五六年」に擬えた解釈が体制転換の記憶と結びつけて語られることは変わっていない。

これに関しては『ハンガリー国民』で代表的な論客だったペー・ティボル Pethő Tibor の分析が興味深い。彼は引喩に満

ちた本作が各時代に理解されうる方法で脚色されてきたことを指摘し、例えば一九八三年のオリジナル版を「根本的に「反対派な」構成の作品」と評した。彼によれば、社会主義体制が倒れた後、イシュトヴァーンにカーダールを見出す解釈は消え、『国王イシュトヴァーン』の音楽は体制転換とそれに続く年月とほぼ軌を一にして美しき象徴となった⁵¹。すなわち、『国王イシュトヴァーン』が体制転換の象徴として一九九〇年代には美化されたと彼は考えたのである。

体制転換後に変更されたことをペテーは次のように解説した。「第一に、ハンガリーから幻想が取り除かれて摩耗し、それに伴って全てが冷たく、形式主義的になった。諸理念は価値を失い、ハンガリー人たちは一九九〇年頃よりも悪い精神状態へと陥った。ハンガリーの人民は「自らを」守る力が無く敗れた。そして、この敗北したこと、より正確には、狼狽させるような、むしろ痛ましい幻想の無さがアルフェルデイの演出した『国王イシュトヴァーン』を貫いている」とペテーは分析した⁵²。すなわち、体制転換後のハンガリーでの社会変動に人々は疲弊し、その閉塞感の強まりを三〇周年記念版の『国王イシュトヴァーン』はアクチュアリティとして提示しようとしたという見解である。

その提示のためにアルフェルデイが取り組んだと考えられるのは、実在する政治家をイシュトヴァーンとコッパニニの対立に投影させるという従来の手法ではなく⁵³、外部勢力によつ

て引き起こされる人々の分断の強調であった。この場合の外部勢力は具体的な対象を指すというよりも、体制転換後のハンガリー社会の変化全般を指すと考えることができる。だがその結果として、彼のオルタナティブな演出の試み⁵⁴や現状の政治に対する消極的・否定的な感情⁵⁵のみが強く印象づけられてしまい、音楽・歌唱・振り付けの技術的な課題も相まって、説得的な演出には至らなかったことも指摘できるだろう。

おわりに

『国王イシュトヴァーン』の初演から三五周年を迎えた二〇一八年も各地で公演が行われたが、筆者が確認する限り、大きな混乱はなく上演されたようである。本作は一九八三年の初演直後から「一九五六年」に擬えた解釈が示されてきた。「一九五六年」の再評価は一九八〇年代末のハンガリーで進行し、体制転換の理念的下支えの一つとなった。その結果、体制転換後のハンガリーで『国王イシュトヴァーン』は体制転換の記憶と共に美化され、一種の正典となった。一方、体制転換によって生み出された社会は左右に二極化し、閉塞感も強まった。

アルフェルデイが二〇一三年に演出した三〇周年記念版では総じてローマ教会（ならびにその協力者のドイツ騎士たち）という外部勢力によってマジャール人が分断されている状況がオリジナル版よりも強調された。彼の演出は『国王イシュトヴァー

ン』の正典化への批判であったと同時に、体制転換から二〇〇年を経たハンガリー社会の分断や閉塞感を反映させようとする試みを伴っていたが、説得的な演出には至らなかったと考えられる。

註

- 1 無名だったがこの上演に合わせて「王ヶ丘 Királydomb」と名付けられた。
- 2 Pályi András, „Dráma vagy apoteózis? István, a király a Városligetben”, *Színház*, XVI. évfolyam (1983), 11. szám, 1. old.
- 3 „Gyorsmértleg az idei szegedi nyátról”, *Népszabadság*, 1984. augusztus 18., 9. old.
- 4 „Hírek”, *Népszabadság*, 1984. október 18., 8. old.; „Befejeződött Kölnben a Nemzeti Színház nagy sikerű vendégjátéka”, *Népszabadság*, 1987. március 10., 9. old.
- 5 Pályi, „Dráma vagy apoteózis?”, 1. old.
- 6 例えはロックオペラ『シーザス・クライスト・スーパースター』（一九七一年初演）との対比に言及されることもあった。Pályi, „Dráma vagy apoteózis?”, 2. old.
- 7 この解釈については当時日本でも紹介された。深谷志寿「ロック・オペラにハンガリー国民、熱狂」・史話劇『国王イシュトヴァーン』、『朝日新聞』一九八五年二月一三日夕刊五面。

- 8 Balla István, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király”, 24.hu, 2008. június 13. https://24.hu/belfold/2008/06/13/brody_csak_egy_trukk_vol/; Maratin Dóra, „Kultúra A magyar rockopera István, az első és utolsó”, *Népszabadság Online*, 2010. augusztus 21. http://nol.hu/kultura/20100821-istvan_azelső_es_utolso-779481 (ウェブページは二〇一九年一月七日確認。以下同様) 渡邊智紀もオリジナル版で音楽監督を務めたマクラーリ・ラースロー Maktáry László に二〇〇二年と二〇〇七年に行ったインタビューを参照しながら、一九八〇年代当時のハンガリー政治について考察した。この中でマクラーリも『国王イシュトヴァーン』が「一九五六年」のアナロジイではなく普遍性を意識して制作されたことが明らかにされている。渡邊智紀「一九八〇年代のハンガリー人民共和国の文化政策についての考察—ロックオペラ『国王イシュトヴァーン』を参考に—」『ウラリカ』一五号、二〇一一年、六五—八二頁。

- 9 Pályi, „Dráma vagy apoteózis?”, 3. old.
- 10 „Megérteni a konfliktust: Rényi András és Sándor Erzi beszélgetése az István, a királyról”, *Mozgó Világ*, 39. évfolyam (2013), 10. szám, 127. old. Szécsi Árpád, „Mondd, te mit választanál?»: Narratívák az István, a király bemutatója kapcsán”, *Rendszerváltó Archívum* 2017/2, 86-92. old. は体制転換後の政権で与党となる中道右派政党のハンガリー民主フォーラムの政治家として後に活動するクラスナイ・ゾルターン Krasznai Zoltán が一九八四年秋に偽名で寄稿した『国王イシュトヴァーン』を批判する地下出版物を紹介している。

- 11 体制転換に「一九五六年」の記憶とその正統性の奪い合いが果たした役割の考察は、平田武「1956年革命とハンガリー現代史研究」、『東欧史研究』三〇号（二〇〇八年）、五五―七三頁に詳しく。
- 12 例えば Pethő Tibor, István, a király: Jai, de unom a politikát..., *Magyar Nemzet*, 2013. augusztus 21., 14. old.; Csóti György, „Az István, a király budapesti előadása: Alfordít nem zavarja, hogy az államalapító által létrehozott birodalom ötszáz évig Európa meghatározó hatalma volt”, *Magyar Nemzet*, 2013. szeptember 4., 6. old. Szécsi, „Narratívák az István, a király bemutatója kapcsán”, 86. old. http://www.istvanakiraly.com 初演当時は反体制派の間で『国王イシュトヴァーン』の評価が分かれていたことが今日では既に驚くべきことと映るかもしれないと述べられており、一九八〇年代当時の反体制派が本作に「一九五六年」のアナロジイを読み込んで肯定的に評価したという認識が現在のハンガリーでは一般的であることがうかがえる。
- 13 Csóti, „Az István, a király budapesti előadása”. 著者のチヨーティは二〇一一年まではハンガリー民主フォーラム、その後は保守政党フィデス（ハンガリー市民同盟（以下フィデス）に所属する国会議員である。フィデスはブダペシュトのピボット・イシュトヴァーン学寮などを中心に大学生など自由主義派の急進的な若手知識人によって一九八八年三月に結成された。設立時の正式名称は「青年民主同盟 Fiatal Demokraták Szövetsége」。現首相のオルバーン・ヴィクトル Obán Viktor は設立時からの主要メンバーである。この略称「フィデス Fidesz」がその後の党名変更を経て残り、同党の通称となっている。フィデスは体制転換後に伝統主義やナショナリズムへと接近した結果、分裂・自壊する伝統主義的ナショナリスト諸政党の議員と支持者の受け皿となり、右派の結集政党へと成長した。平田武「ハンガリーにおけるデモクラシーのバックスライディング」、日本比較政治学会編『体制転換／非転換の比較政治』ミネルヴァ書房、二〇一四年、一〇八頁。
- 14 DVD *István, a király: Az eredeti, 1983-as rockopera (25 éves jubileumi kiadás)*, Dokton Media Bt., 1983.
- 15 DVD *István, a király I.K.3.0—30. éves jubileumi előadás*, Universal Music, 2013.
- 16 『人民の自由』は一九四八年六月二日の社会民主党の解体と共産党への合同によって成立したハンガリー勤労者党の機関紙『自由な人民 Szabad Nép』が前身で、勤労者党が一九五六年のハンガリー事件の中でハンガリー社会主義労働者党へと改名した直後の同年一月二日から刊行された。体制転換後は社会主義労働者党から改称して社会民主主義路線を強めた社会党との関係を残しながらもハンガリーで代表的な左派系日刊紙として刊行が続けたが、二〇一五年にメディアアウォクス・ハンガリーが同紙を買収し、翌年一〇月八日付で経営難を理由に刊行を停止した。
- 17 『ハンガリー国民』は一九三八年に刊行された保守系新聞で、一九五四―八九年は愛国人民戦線 [Hazafias Népfront] の機関紙として活動した。体制転換後の同紙は右派系新聞となり、二〇〇〇年代からはフィデスの機関紙的な位置づけにあったが、経営者がオルバーンと袂を分かったことが二〇一五年二月に公になった後、二〇一八年四月一日に刊行を停止した。この決裂が明るみになってからちょうど四年が経った二〇一九

- 年二月六日に同紙は刊行を再開した。但し実態は決裂後にオルバーン政権の機関紙の役割を果たしていた『ハンガリーの時代 *Magyar Idők*』が後を継いだ形である。
- 18 初演時にはセレーニーが吟遊詩人役で歌った。
- 19 Boldizsár Miklós, „Ezredforduló”, *Színház*, XIV. évfolyam (1981), 9. szám, drámanellékelte, 1-24. old.; Boldizsár Miklós, *Ezredforduló*, Budapest, Szabad Tér Kiadó, 1990.
- 20 Balla, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király?”
- 21 Matain Dóra, „Kultura A magyar rockopera István, az első és utolsó”, *Népszabadság Online*, 2010. augusztus 21. http://nol.hu/kultura/20100821-istvan_az_elso_es_utolso-779481
- 22 Ibid.
- 23 Balla, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király?”
- 24 Matain, „Kultura A magyar rockopera István, az első és utolsó”.
- 25 Balla, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király?”
- 26 „Extrák—Részlet a Stúdió '83 c. műsor 32. adásából: Az István, a király városligeti próbája, beszélgetes Szőrényi Leventével, Bródy Jánossal, Boldizsár Miklóssal, Koltay Gáborral”, DVD *István, a király: Az eredeti, 1983-as rockopera (25 éves jubileumi kiadás)* 1. lemez.
- 27 „Vinyánszkyé lett a Nemzeti Színház”, Index.hu, 2012. december 17. https://index.hu/kultura/2012/12/17/vidyanszky_atitae lett_a_nemzeti_szinhaz/
- 28 „Összetűz a buzizó Kerényi Imre”, Index.hu, 2013. május 24. https://index.hu/belfold/2013/05/24/osztuz_a_buzizo_kerenyi_imre/
- 29 Csáki Judit, *Alföldi színháza—Űr nemzeti év*, Budapest, Libri Könyvkiadó, 2013.
- 30 „Megértene a konfliktust”, 127. old.; Szabó, „István, az államtitkár”, Index.hu, 2013. augusztus 21. https://index.hu/kultura/2013/08/21/istvan_az_allamtitkar/
- 31 Pályi, „Dráma vagy apoteózis?”, 3. old. 例えばインシュヴァーンの声はロック歌手のヴァルガ・ニコローシユ Varga Miklós、レーカの声は著名な民謡歌手のシムンシユチエン・ペールタ Sebestyén Mária、ロシバリーユはロック歌手のヴァイキタール・シユハラ Vikidál Gyula が演じた。
- 32 オリジナル版でインシュトヴァーンの声を当てるヴァルガとラポルト役だったナジ・フエロー Nagy Feró が第一幕で吟遊詩人として IK-1983 のナンバープレートを付けたトラバントで登場した。この登場はギゼラのメルセデス・ベントンの登場と対を成すが、社会主義期に上演されたオリジナルキャストが再演していること、および吟遊詩人として時を超える役割が与えられていることが考えられる。ヴァルガが演じた吟遊詩人はその後も度々舞台上に現れ、一連の展開を遠くから見守った。
- 33 „István, a király: megosztotta a kritikásokat”, atv. 2013. augusztus 22. [130](http://www.atv.hu/belfold/20130822-istvan-a- kiraly-kapott-hideget-meleget;_Klisek_unalom_Wehrmacht: Az Alföldi Róbert rendezte István, a király budapesti bemutatója sem sikerült”, <i>Magyar Nemzet</i>, 2013. augusztus 31., 14. old.</p>
<p>34 „スター・ウォーズ」のシスの騎士たちを想起させ、ライトセーバーの代わりに赤色の十字架を持っていると紹介した記</p>
</div>
<div data-bbox=)

- 事^のあ^らわ^せ。 „Kliskék, unalom, Wehrmacht”.
- 35 例^のあ^らわ^せ Csóti, „Az István, a király budapesti előadása”.
- 36 „Kliskék, unalom, Wehrmacht”.
- 37 „Megérteni a konfliktust”, 128. old.
- 38 Balla, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király”.
- 39 Kornedy Zsuzsanna, „Unom Alföldit, de a hecckampányt is: Szent István nem Dobzse László, a gyűlölet felkeltése nem azonos a katarzissal”, *Magyar Nemzet*, 2013. augusztus 26., 6. old.
- 40 Csóti, „Az István, a király budapesti előadása”.
- 41 ビューを想起させる演技だと評した記事もある。振り付けが単にごまごま指摘が見られた⁵⁰。Szabó, „István, az államtitkár”.
- 42 „Kliskék, unalom, Wehrmacht”.
- 43 „Megérteni a konfliktust”, 128. old.
- 44 „Hisztéria van Alföldi rendezése körül”-Szörényi Levente az István, a királyról”, *színház.hu*—Magyar Színhazi Portál, 2013. augusztus 25., https://szinhaz.hu/2013/08/25/hisztéria_van_alfoldi_rendezese_korul_szorenyi_levente_az_istvan_a_kiralyrol
- 45 *Ibid.*
- 46 Balla, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király”.
- 47 正式名称は「ヨッピー・ハンガリーのための運動」。一九九九年一月に結成された政治サークル「右派青年共同体 Jobboldali Ifjúsági Közösség」(右)の略称が「ヨッピー」(Jobbik)を母体として二〇一三年に設立された。
- 48 „Fideszes beleegyezéssel, 65 milliós támogatással megy Szegeден Roberta nemzetgyalázása”, 2013. augusztus 19. <https://kuruc.info/r/26/116548> 上の論説は「反ハンガリー主義 Antimagyarizmus」のカテゴリーに属す。
- 49 「ハンガリー国民」によれば両側共に参加者は一〇〇—一五〇名、「人民の自由」によれば急進右派側は八〇—一〇〇名が集まった。 „Kliskék, unalom, Wehrmacht”; „Akinkek teiszert, és akinek nem”, *Népszabadság*, 2013. augusztus 31., 7. old.; „Az antifasiszták tüntemel”, *Népszava*, 2013. augusztus 29., 6. old.
- 50 Zappe László, „A hiányzó nem hiányzik”, *Népszabadság*, 2013. szeptember 11., 15. old.
- 51 Pethő, „István, a király: Jaj, de unom a politkát..”.
- 52 *Ibid.*
- 53 ブローディは二〇〇八年のインタビューでハンガリー社会の分裂、特に二〇〇六年以降のナショナリスティックな言説の過激化とそれに対する非難という対立構造に「国王イシュトヴァーン」を位置づけた時の解釈を問われ、実在する政治家をイシュトヴァーンとロッピーニユの対立に投影する(これは初演以降常に可能であった)但しその他の登場人物たちは(難し)と云う見解を示した。 Balla, „Bródy csak egy trükk volt az István, a király”.
- 54 „Hisztéria van Alföldi rendezése körül”-Szörényi Levente az István, a királyról”.
- 55 Szabó Brigitta, „Unoma”, *Népszabadság*, 2013. augusztus 26., 12. old.